第１回信州学び円卓会議　委員発言概要

参考資料５

教育システムのあり方について

・望ましい学びを実現することを教育に関する制度、仕組みが妨げている。
・学校の変わりにくいシステムから変わるシステムを作っていく議論をしていきたい。
・地方創生の鍵は教育。
・教育はすべての政策の基本。
・教育への重点的な予算配分が必要。
・長野県こそ持続可能な教育を進めていくべきではないか。

学校の自治による学校づくりについて

・校長の裁量権を強めることが出来れば、学校を変えていくことが可能。
・本当は学校にはもっと自治権があるはず。
・マネジメント力のある校長の主体的な学校自治の保障。
・校長にマネジメント力をつける研修体系ができているか。
・若い教員が校長とともに、子どもたちが来たいと思える学校づくりができるとよい。
・変えていくときには若い教員が必要で、予算の配当、重点的な人の配置が必要。
・学校や先生が自由になることが重要で、それを教育行政が支える必要がある。

学校における働き方改革と、教職の魅力向上について

・現場を信頼し、教員をパートナーとして仕組みを作っていくことが学校を変化させるカギ。
・自立した教育者の自由な意思決定を尊重するべき
・教員の働き方改革と職業としてのイメージアップが重要。
・フィンランドでは教員の専門性が高く、人気があり、校長に予算権限があり、校内にカフェのような環境もある。
・日本の学校は忙しく学び直しも出来なければ、家族を大切にしながら働ける環境でない。
・中山間地の学校を希望する教員がいない。
・教科を学ぶ時間で精一杯で子どもが好きなことを追求する時間が取れない。
・先生に余裕ができることが重要。業務支援員の配置や部活の地域移行を促進する必要。
・教員を志望する学生が減少しており、危機的状況。
・現場で子どもたちと向き合う教員を支える体制づくりが何よりも大切。

全ての人に魅力ある学校になるための仕組み・価値観について

・地域や民間等、多様な連携で子どもたちの育ちを支えることが大切。
・教育という世界、価値観の固定、集団の行動規範に苦しむ子どもや保護者がたくさんいる。
・未来を考え、周りがどのように価値観を変えていくことができるのかが大切。
・高校入試の在り方の抜本的な見直しと県独自の教員配置基準について議論ができれば。
・子どもたちがその地に生まれたことを誇りに思えるような学校を目指すべき。
・学校が安心でき、来たいと思ってもらえる場所になることが重要
・授業を支える学習環境が弱い。
・私学の先進的な取組を公立に取り入れてもよいのではないか。

荒井座長議論のまとめ

■ 教育に関するこれまでの当たり前を変えていくこと
■ 学校の自治、教師の自由を保障するため、教育システムのあり方を問い直していくこと

第２回信州学び円卓会議　委員発言概要

①子どもたちがやりたいことを実現できる学校づくり

・学校が変わるのにどのようなリソースが必要か。
・好きを突き詰められる授業、子どもが選べる授業といった時間を創出できない。
・新しいカリキュラムをつくるとき、既存のものをどう変えるかという発想では新しいものは生まれてこない。
・子ども同士の中で育つ、発見する、気付くことがあるため、そのような場・機会をつくることが大事。
・学習指導要領があるが、どこまで学校の自由度があるのか。

②教員がチャレンジしたいことを実現できる学校づくり

・教育関係者のエンパワーメント。物理的・時間的・精神的なゆとりに係る条件整備。
・チャレンジしたい校長先生が学校のマネジメント、学校づくりに専念できる体制をどうつくるか。
・自主的に学びたい教員の思いを支えるような仕組みをどうつくるか。
・教員が自治体や学校を超えてネットワークとしてつながっていくボトムアップのコミュニティを仕組みでどう支えるか。
・チャレンジしたい学校に伴走支援し続ける専門家の育成。
・今持っている小さいリソースで何とかしろというのは限界がくる。

③多様性の時代に即した入試制度のあり方

・探究学習について、高校や大学入試、社会においてどのように評価されるか不安で、既存のシステムからはみ出してはいけないという恐れがある。
・学習内容の削減が入試に影響しないなど、目に見えるところが変われば、学校でアイデアを出して探究をやっていくことができる。

④様々な機関で連携・協働を推進していくための仕組み

・「学び＝学校教育」という認識に偏りがちだが、長野県では、もっと豊かな芳醇な学びのあり方を構想し、実現していける可能性を多く秘めているのではないか。
・子どもたちが持つ才能や興味関心を学校外でどのように発揮できるか、行政や学校外の団体が連携して考えて動いていくことが大切。
・他の学校、小中高大で相互に繋がっていくための組織や仕組みがあると連携しやすい。
・個別の学校の対応ではどうしても限界が出てくる。

⑤小規模校ならではの学びを実現するために必要な環境整備

・地域で抱える課題に対して試行的に取り組んでいくことも必要。
・小規模校をどうやって働きやすく、学びやすい場所にするか、意外と挑戦すれば可能性は見えてくると思う。
・ベテラン・中堅・新任の先生が支え合える環境づくりが必要。
・小規模校の良さ・多様であることを、県全体が共有できる教育資源として捉え、広域的な視野で最大限活用するという発想も必要。
・年齢ごとの区切りが窮屈ならば、縦につなげていけるようになるとよい。

⑥学びの場を信州全体で支えていくために必要な取組

・あるべき学習者像の共通認識ができていれば、辿り着き方が異なるだけで、より自由な学びができる。それぞれの学び方でも互いに認め合える環境ができたらよい。
・学校現場だけに任せるのではなく、様々な機関と協力しながら一緒に取り組んでいくといった進め方、機運醸成が必要。
・どういう教育、学びをするのか、子どもたち、保護者、学校、地域等のコンセンサスが必要。

荒井座長議論のまとめ

■ 教育に関する制度や現在の取組を共に学びながら方策の検討を進める
■ 人口減少や少子高齢化の課題に直面する中山間地域をモデル的に対象として、地域の抱える課題に取り組む

第３回信州学び円卓会議　委員発言概要

①子どもたちが学校等でやりたいことを実現できている

・これまでの基礎的学習も大事にしつつ、バランスを取りながら探究的な学びを実践することが大事。
・子どもが学びへのモチベーションを最も強く感じるのは、その学びの意義や、その学びが他者や社会にどう影響するのかを実感できたとき。
・探究的でクリエイティブな学びをさらに評価してほしい。現行制度に制約される部分はあるが、そのような中でも校長の裁量で行えることは多くあるのでは。

②教員が学校等でチャレンジしたいことを実現できている

・学習指導の内容を工夫して、教材研究の時間を創出することが大事。
・子どもの主体的・能動的な学びをどう学習指導要領と結び付けるかについて教員が学べる場や研修が受けられる機会が必要。
・校長が予算や裁量権を持った上で、長期的に学校をマネジメントすることが重要。
・まず教員自身が挑戦すること。その姿を見て子どもの主体性が育つ。
・自由な学校運営をしている学校とそうでない学校との違いを管理職個人の資質の問題にしてしまうのは違うのでは。
・教科書や指導書等に事細かに記載があり、ここに書いてあることを全部教えてあげないと子どもたちの未来の選択肢を削いでしまうという強迫観念があるのでは。

③多様性の時代に即した入試制度になっている

・探究学習の充実と生徒が目指す進路実現をどうスムーズに結び付けていくかというところが重要。

④様々な機関が連携・協働している

・県内の先進的な取組をしている学校から取組成果を共有してもらい、学んでいく仕組みを作る。
・学校の教員と学校外の支援団体等が対話をする場がまだ少ない。
・当事者の子どもや保護者、支援者等が一緒にどんな学び方で学んでいくのか合意形成を図っていく場所をつくることが大事。
・自治体や学校が、限られた人材や予算、資源等をいかに共有するか。
・教育委員会を広域化し、権限や財源等をおろしていくことで、責任を持って地域全体の質を上げるような取組もしやすくなるのでは。

⑤小規模校ならではの特色ある学びが実現できている

・中山間地域において、規模が似通った学校同士で情報交換や連携をし、異なる学校間の若手・ベテランの先生が協働するなど、学校を超えた様々な学びが実現できると良い。
・小規模校が多いことを強みにできるのではないか。
・複式学級を廃止し、異年齢・少人数を活かした学習者中心の学びにチャレンジしたり、特例校制度を積極的に活用したりするなど、小さい学校だからこそ変革の可能性がある。

⑥学びの場を信州全体で支えている

・学校のチャレンジを保障するための様々な支援が生まれると良い。
・学校改革の伴走支援や専門家を育成する専門組織をつくったらどうか。
・それぞれの学校や自治体の努力をエンパワーしていくことが教育行政の一番大きな役割ではないか。
・色々な機関と学校との関係、学校内と学校外の関係など、様々な関係性を見直さなければ、子どもたちにとって最善の学びにつながっていかないのでは。

荒井座長議論のまとめ

■ いただいたご意見を信州学び円卓会議の案としてお示しし、県民の皆様のご理解を得ていくプロセスに移行していきたい

第４回信州学び円卓会議　委員発言概要

①子どもたちが学校等でやりたいことを支える

・「主体的・対話的に学ぶ」という言葉は、通常の授業の充実という面が強調される。目指す方向として「『好き』『楽しい』『なぜ』を追求できる探究」という部分にクローズアップしていく捉え方を共通認識としたほうがよい。
・「やりたいことを実現できる」としたときに、やりたくないことはやらなくてもよいのかとか、やりたいことだけやっていて受験に合格できるのかとか、保護者や子どもたちは少し戸惑う部分があるのではないか。

②教員が学校等でチャレンジしたいことを支える

・既存の組織・団体のより強固な連携からでも先生方を支援していく仕組みにつながるのではないか。
・組織の中で一生懸命やると浮いてしまうことがあり、そうした先生を支援する雰囲気づくりが大事。
・大学と地域がより連携、密着した教員養成を考え、実現していかなくてはいけない。
・意識改革のため、先行事例の紹介などにより、現場の教員がこれからこんなことをやっていきたいという思いが持てるような取組も必要。

③一人ひとりの学びや得意を共に認め合う仕組みを検討する

・今年度から高校の前期試験にペーパー試験が課される。多様性の時代に即した入試制度に逆行してしまわないか懸念がある。
・今後探究的な学びに対応した入試に変わっていくと思うが、今は過渡期で、その不安感が先生方の負担になっているのではないか。
・学校の中でも外でも、評価されている子、されていない子はそれぞれいるが、そもそも学校内・学校外という線引きが要るのか。

④長野県の中山間地域の強みを活かした特色ある学びを広げる

・異年齢学習は、子どもと共に先生も混ざる、見方が広がるということで、必然的に子どもの成長に目が向き、校内での教職員の学び合いも活発になるのでは。
・少人数の中での学びの良さを子どもたち自身も自覚しつつ、これから中学、高校、大学、社会に出ていくときの不安を持っている。不安の解消のためには、自治体を超えた連携が必要。
・10年先、20年先の学校のあり方を、行政と教育委員会、学校が共有することが非常に大事。

⑤「こどもまんなか社会」の実現に向けた様々な機関の連携・協働を進める

・こどもまんなか社会を考えたときに、積極的な子も消極的な子も、学校に行っている子も学校以外の学びを選んでいる子も、等しく自分たちの意見を言える場所、仕組み・制度が必要。
・幼保小の接続が重要。「信州やまほいく」と小学校をどのように接続するか。幼稚園・保育園の子どもたちは主体的・対話的な学びを既にやっているが、小学校で途切れてしまう。
・学びの場は自由になってきている。学校だけではない、もう少し幅広い概念で学びを考えていけたらよい。

⑥多様な学びの場を信州全体で支えるネットワークを再構築する

・みんなで長野県の教育をこんな方向でやっていきたいとしていくためには雰囲気づくりが大事。そのベースには寛容であることが必要。
・目指すものに対してアプローチの仕方は様々あるため、その様々なものが大事にされる長野県の教育文化、風土でありたい。
・民間で専門的な知識・技能を持っている人材のリストをつくり、地域間で活用できる取組ができるとよい。

荒井座長議論のまとめ

■ メッセージ発信や関係団体との意見交換を通じて、信州学び円卓会議の議論の内容を県民の皆様にご理解いただき、関係する様々な主体における取組につなげていきたい